THE HIROSAKI UNIVERSITY LIBRARY BULLETIN

弘前大学附属図書館報　No.45　2017.5

目次

巻頭言　1
特集　図書館利用者ガイダンス・講習会　3
本との出会いを楽しむ<18 回>　6
デジタル・アーカイブの紹介　7
図書館に関する話題<18 回>　8
Library News　10
本学教員等著作寄贈図書・資料一覧　12

読むことの愉しみ

理事（企画担当）・副学長　吉澤　篤

私が本を読むことに面白味を感じたのは 1976 年に大学に入学してからです。40 年以上前になりますが、下宿の部屋にはラジオだけで、テレビもオーディオも有りませんでした。もちろん、インターネットはまだまだ未来の出来事です。お金は無いけど時間はたっぷりありました。読書の場所は下宿であり、また喫茶店でした。気に入った本を小脇に抱えてクラシック喫茶に入り、１杯 250 円のコーヒーの香りとセブンスターの紫煙とともにブラームスの１番を聞きながら本のページをめくっていました。そこに何か目的があったわけではありませんが、本を読む愉しみがあり、今思い返しても至福の時間でした。柴田翔の『されど　われらが日々』から始まり、乱読しました。当時、１、２年生は教養部に属し、３年生から学部に入って専門教育を受けます。ぶらぶら読書の最後は、２年生が終わった春休みに読んだ小出昭一郎著『量子論』です。内容を正確に理解できたわけではありませんが、３年生の無機化学の講義で原子構造の説明を聞いたときに、量子論の物理的意味と化学が結びつきました。講義室での感動をはっきり覚えています。化学の面白さを知り、大げさかもしれませんが、人生が変わりました。私は工学部化学系の学生でしたので、午前中は講義、午後は実験、そして日曜日は実験のレポートや宿題で休みが終わりました。４年生からは研究室に所属し、実験台と机を与えられました。そこで一日の大半を過ごすのです。研究室では実験に追われ、図書室へ行くのも文献調査としばしの休憩が目的でした。そこに毎週１回、退官後 10 年以上経つ名誉教授の先生（私が指導を受けた教授の恩師）が来られ、新着雑誌を読み、メモを取られていました。今の我が身を振り返り忸怩たる思いがあります。

私は 1985 年に博士課程を修了し、企業の研究所に入りました。その頃読んだ本が井本稔著『ナイロンの発見』です。主人公カローザスはハーバード大学の講師からデュポンの中央研究所に移り、そこで合成ゴムやナイロンを発明した化学者です。カローザスの日常というより思索の過程が日記風に綴られています。この本は何度も読み返し、企業での研究生活の拠り所としました。約 15 年間企

業で過ごしましたが、この時期に読んだ本から多くを学びました。読書は自らが経験できない他の人生の”追体験”だと思うようになり、作者が登場人物に語らせる言葉に心引かれるようになりました。例えば司馬遼太郎著『坂の上の雲』や高杉良著『生命（いのち）燃ゆ』です。『生命燃ゆ』は昭和電工の石油コンビナート建設に尽力し、若くして病で世を去った技術者をモデルにしています。作者は主人公に「未練はあれど悔はなし」と語らせています。もっともっと生きたい、しかし、振り返って我が人生に悔は無い。何とすばらしい言葉でしょう。また、永田親義著『独創を阻むもの』では、独創的研究とは不安と危険に満ちた旅であり、次の物理学者ハイゼンベルクの言葉を借りて、コロンブス的勇気がブレークスルーには必要であると書かれています。「コロンブスのアメリカ発見の航海で最も困難であったことは、既知の陸地を完全に離れ、残余の貯えでは引き返すことがもはや不可能であった地点から、さらに西へ西へと船を走らせるという決心であったに違いない。」(『部分と全体』)。これは広く受け入れられている概念を放棄して新しい理論の世界に飛び込んでゆく勇気を例えたものですが、研究のみならず種々の場面で私たちが遭遇する決心や決断にも通じるところがあると思います。

私は2000年に会社を辞め、弘前大学に移りました。そこで実感したのは「教うるは学ぶことなり」です。「教うるは学ぶの半ばなり」（『礼記』）という名言がありますが、私は民法学者末川博著『彼の歩んだ道』でこの言葉に出会いました。私にとって読書が国語の勉強のためだった高校時代に読んだ本です。そして、今、教えるための学びで図書館に通います。そこには学生時代とは全く違う学ぶ愉しみがあります。昨年も講義の準備のために入った図書館で 30 年間気になっていたことが解決しました。研究室で大学院生や４年生の研究指導をし、また、他の研究者の論文を査読することが多くなって、専門分野の文献の読み方も変わってきました。日本で最初にノーベル化学賞を受賞した福井謙一博士はその著書『学問の創造』の中で「文献を読む時は、字句の深層に横たわっているものを自分なりに補足しなければ本当に理解したとは言えないはずである」と述べておられます。研究論文を読むことで他の研究者の思索を”追体験”し、自分なりに補足して読んでいるうちに自らの研究に対して新しいアイデアが湧いてきます。

大学入学以降から現在までを、学生・大学院生（９年）、企業研究者（15年）、教員（17年）の３つに分けて本との関わりを振り返ってみました。そして今、カフェの片隅を書斎がわりにしていたフランスの哲学者のように、お気に入りの喫茶店で書を読み、思索にふけりたいと願っています。もし弘大カフェで私を見かけたら、カフェラテを飲んで休憩しているのではなく、仕事しているのだと思ってください。

（よしざわ　あつし）